
三ツ世巡り

初瀬こより

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

三ツ世巡り

【Nコード】

N7024H

【作者名】

初瀬こより

【あらすじ】

時の混在する国と呼ばれる島国のとある平和な村。そこへやってきた僧侶は鬼に会うため、古くから髑髏を抱えた鬼女が座るといいう山の麓の岩へと向かう。そこで出会う鬼女が語るのは――。

生臭破戒坊主

この国は死んだ人間が辿り着くと言われる。
だが、時の混在する国と呼ばれるそこに住むのは紛れもない命ある者。

帝都と呼ばれる、この国の中心地からはだいぶ下った邑くにを形成する村の一つ。この辺りは帝都に比べれば、未だ百年以上は昔の生活が根付いている。

初夏のある日。珍しく村に余所からの訪問者があった。
墨染めの僧衣に袈裟けさ。その手には金属音を鳴らす錫杖しゃくじょう。編み笠を
目深に被っているため顔や年の頃はわからないが、その風体からその男が僧侶であり、それも旅をしているらしいということは外界の情報に疎い村人にもすぐさま理解できた。

ただし、彼が清廉潔白な僧侶か、それとも俗呆けた生臭坊主かまでは計りかねるが。

村で唯一の旅籠はたごを営む男とその妻は、一宿を求めてきた僧侶に茶を勧めながらその全身をしげしげと眺めた。

「随分若い坊さんだなあ」

「それになかなかの男前じゃないか」

旅籠の主人と妻は笠を外し足を崩して座り込んだ僧侶に軽く目を見張った。

年齢不詳だった僧侶は随分と若い。その顔から察するに二十を幾つか超えたくらいだろう。だが、年齢よりも先に気になることがあった。

「……坊さん、だよな？ 髪、あるけど」

「お坊さんは皆、頭を丸めるもんじゃないのかい？」

主人と妻は揃って僧侶の頭に目線をやった。

二人分の視線を浴びる僧侶の髪は、まだこの辺りでは一般的な鬘まげを結う程長くはなく、所謂「ざんぎり髪」に近い。かと言ってそこまで短くもなく、眉やうなじにかかる程度に伸びているのがまた奇妙に映った。

「あんた、本当に坊さんかい？」

主人に問われ、若い僧侶は妻に差し出された団子を手にしながら口を開いた。

「ん。一応実家は寺だ」

「んじゃあ未来の坊さんか。何だい、修業の旅かい？」

「そんな大層なものじゃねえけど」

ぞんざいな口調ながら律儀に答え、僧侶は合間に団子を頬張る。するとふいに、僧侶の目が子供のように輝いた。

「お。この団子、美味い」

「もっと食べるかい？」

「是非」

僧侶の即答っぷりに妻は笑い、もっと作ってくるから待ってなど言って奥へ行った。

「そんで坊さんは修行の旅だっけか？ 若い身空で大変だなあ」

主人は茶を飲みながらしみじみと言った。

「や。だからそんな大層なものじゃねえって。それより親仁おやじ」

僧侶は食べ終えた団子の串を皿に置き、主人を真っ直ぐに見据えた。その黒い双眸は刃にも似た鋭さがあり、空気は肌で感じられる程張り詰める。

思わず主人は息を呑んだ。

すると僧侶はその鋭い目を一切緩めずこう言った。

「この辺、化け物とか出ないか？」

「……化け物？」

主人が聞き返すと僧侶は大きく頷き、真剣そのものの表情で繰り返す。

「ああ。鬼とか物の怪の類の話、この辺りにないか？」

「……」

主人の僧侶を見る目が胡乱うろんなものとなり、張り詰めていたはずの空気は途端に萎み、緩みきっていった。

「あんたあ……今時本気で言ってるのかい？」

僧侶は一度大きく息を吐くとその真剣そのものだった表情を崩し、どこか気の抜けた顔をした。

「信心深くて古臭い田舎……じゃなかった。こういう古い土地柄ではまだ魑魅魍魎が市民権を得てると思ったんだけどな」

僧侶は頭をかきながらぼやく。

そうしていると、もうごく普通のどこにでもいる青年に見えてくるから、自然と主人の言葉も次第に砕けたものとなっていった。

「一応うちはこの村で唯一よその情報の集まる旅籠だ。確かに帝都あたりにゃ及びもしねえが、俺はこれでも村一番のハイカラ者よ」

「うん。ハイカラって恥ずかしげもなく言った辺りに、この村では革新的で国規模で考えると古いつてのがよくわかった。最近じゃ旅籠って言うのも珍しい」

僧侶はうんうんと一人で納得したように頷く。

主人は顔を赤くし、照れ隠しに僧侶の頭を軽く叩いた。

「痛」

「可愛げのねえ坊さんだ」

「俺も可愛いと思われても困るな。たまにいるんだよ。坊主のナリをしてるだけで男色趣味があると本気で考えるような奴が」

僧侶は叩かれた頭をさすりながら、涼しげな容貌を心底忌々しげにしかめた。

「あー……坊さんはそっちの趣味じゃないのか。俺も坊さんてのは皆そういう趣味だと思ってたよ」

僧侶は女との交わりを禁忌としている。それ故、彼らの間では男色が当たり前なのだと噂に聞いていたのだが。

「断じてない。俺はな、自慢じゃないが『生臭破戒坊主』と知人に言われるような男だぞ？」

「……確かに自慢じゃないわなあ」

生臭の上に破戒とは。

そもそも髪は剃るのが一般的な僧侶が髪を伸ばしている時点かどうかと思うが。

「野郎の相手なんて、金銀財宝を山と積まれても御免被る。そんな奴は四肢をへし折って、有り金むしり取ってそれで遊郭にでも向かわせてもらう」

「そりゃ大した生臭っぷりだ」

力説する若い僧侶に主人は豪快に笑い出した。その知人とやらも随分うまい呼び名を考えたものだ。

「健全な男らしくていいだろ？」

「違いねえ。そんな時はぜひ俺もご一緒させてもらいたいね」
僧侶と主人は顔を見合せて笑った。

「じゃあ生臭坊さんは酒はいけるかい？」

「嗜む程度には？」

不敵に笑う僧侶を見て、主人は奥へ行った妻に「酒も頼む」と声をかけた。

それから間もなく団子と酒瓶が運ばれてきて、主人と僧侶は酒を酌み交わし、気づけばすっかり日も暮れていた。

「なあ親仁。今日は俺以外に客いねえの？　ずっと俺の相手してていいのか？　接客態度悪いとか風聞立ったらよくなくね？」

「んあー、くおんない田舎に来る客なんか、滅多にねーよお」

三升以上は飲んでいるはずなのに、多少陽気になった程度の僧侶

に対し、主人は顔も真っ赤にした上に呂律も回らない。

「あんた！ それくらいにしときな！」

「あぁっ、ひでえよひでえよ」

妻から猪口ちよこを取り上げられ、主人は酒瓶に抱きついて泣き出した。だが妻も慣れた様子で無視して僧侶を見た。

「坊さん。部屋はどうする？ あんたの言う通り、今夜のお客はあんた一人だから一番いい部屋から安い部屋まで好きに選べるよ。つってもこんなボロ宿だから大して変わりゃしないけどね」

「じゃあ一番安い部屋で」

「一番いい部屋に泊まって、うちを潤してくれもいいんだよ？」

「酒代で十分潤したと思うけど」

僧侶が空になった酒瓶の数々を見やると、妻は笑ってそれらを片づけ始めた。

「半分はうちの亭主だからね。そんなに潤ってないさ」

「ん。半分以上飲んだと思うのは俺だと思うのは俺だけか？」

どう足掻いても親父は一升飲むか飲まないかだと思ふのだが。

だが妻は笑って言う。

「ああ。あんただけだよ。こんなに飲むのも、うちの酒屋も同然の宿に泊まってってくれるのも」

「……そうか。じゃあたまには部屋代を奮発しよう。二番目くらいにいい部屋で」

「一番じゃないのかい？」

「俺は坊主だから、贅沢は慎むべきだろ？」

しれっと言う坊主に妻は一瞬呆氣にとられた顔を見せてから、主人に似た嫌みのない豪快な笑い声を上げた。

「それだけ飲んで、何を慎むんだか」

「これは酒で身を清めてるんだよ」

「そうかい。じゃあ部屋を準備してくるから、悪いがもう少しうちの酔っぱらいに付き合ってやっておくれ。人と酒を飲むのが生き甲斐みたいな男でね」

妻は足取り軽く階段を上がって行った。

僧侶はそれを眺めながら、新たに酒を注いだ猪口に口をつけた。

「いいカミさんだな。親仁。俺と一緒に遊郭に行ったら罰が当たる」

「……知らねえや」

畳に寝転がる主人の顔が赤いのは、酒のせいだけではないだろう。

「ま……悪くはねえわ」

「だろうな」

僧侶は笑って猪口を置き、長時間座っていたせいで凝り固まった体を伸ばした。

主人もむくりと身を起こし、赤い顔を僧侶へ向けた。

「この辺りじゃいい男は鬼に食われちゃうって言うんだけどよ、俺は運よく生き延びて今のかみさんと一緒になれたってわけよ」

「運よく？」

熊のような容貌の主人の言葉に笑ってから、僧侶は置いた猪口を主人の手に渡して片手で酒を注いだ。

「じゃあ運のいい親仁」

「何だい？」

「そのいい男を食っちゃもう鬼について教えてくれるか？」

なみなみと注がれた猪口に、僧侶の鋭い目が映る。薄い唇だけで笑い、主人を見ている目が。

「……何だか坊さんってよりは、あんたのが鬼みたいだな」

主人は僧侶の視線から逃れるように酒を一気に煽った。

口元に笑みを浮かべ、僧侶は軽い口調で言う。

「人が化け物の類の話はあるかって聞いた時に素直に教えてもらえなくて拗ねてるだけさ」

「最近じゃすっかり廃れた話なんで忘れてただけだ。今しがた、口を衝いて二十年振りくらいに思い出したくらいだな。ついでにあんまり妙な坊さんなんでそっちに気を取られすぎてた」

「妙なつてのも失礼だな。こんな善良な僧侶を捕まえて」

「善良な坊さんは生臭とも破戒とも言われねえんじゃ？」

「これは言った奴の口が悪かっただけの話さ」

思いの外楽しげな様子を見せた僧侶に毒気を抜かれ、主人は一息吐いた。

「全く妙な坊さんだ。妙なついでにお祓いでもしてくれるってか？」

「報酬次第で考えてもやってもいいけど？」

「ってことは普段から拝み屋みたいな真似してくれるってわけでもないってことか」

「残念ながら。俺は鬼と少し話したいだけだから、そこから先は俺の気分次第」

「話したいだけ、ねえ……」

主人は猪口を突き付け、僧侶は静かに酒を足した。

「村の丁度西にある山の麓に大きな岩があつてな」

ぽつりぽつり、と主人は話し始めた。

生臭破戒似非坊主

「村の西の山の麓の岩……そこには昔から鬼女が座ってるそうだ。

どれくらい昔からかは知らねえ。俺のじいさんも自分のじいさんから聞いたって言ってたから、それくらい昔からなんだろう。そんな噂があるから俺らは西の山へ行ったことがないから見たことねえが、偉い別嬪^{べっぴん}の鬼女だそうだ」

注がれた酒に視線を落とし、主人は続ける。

「通りすがりの旅人なんかはそれを見て、この辺りの村人だろうと声をかけようとするらしいが、女に近づくにつれすぐ様考え直す。そして同時に慌てて来た道を引き返す。何故かわかるか？」

「いや」

僧侶が首を横に振ると、主人は淡々とした口調で言った。

「その女の手には、いつだって髑髏^{むくろ}……人間の頭蓋骨が抱えられてるんだそうだ。ボロボロの、いつのものともしれねえ古い仏さんが」

「されこうべ……」

僧侶は声を低くして繰り返した。

流石の生臭坊主も怖気づいたのかと思いきや、僧侶は真剣そのものの顔と声で呟いた。

「ありきたり過ぎる」

「……………は？」

主人がつい間の抜けた声を出すと、僧侶はもう一度言った。

「ありきたり過ぎだろ？　されこうべ抱えた鬼女なんて。そんなどつかで聞いたような話、絶対そこらの年寄りの作り話だ」

僧侶は失礼な言葉を並べながら、ひとりで勝手に項垂れた。

「実際にされこうべ抱えた鬼女なんて俺、あちこち回ってもまだお目にかかったことねえもん」

「……坊さんはされこうべを『抱えてない』鬼なら会ったことあるのかい？」

主人の冗談半分口を衝いて出た言葉に、僧侶は顔を上げて小さく頷いた。

そして再び項垂れてしまった僧侶を見て、主人は大仰なまでに息を吐いた。

「はー……鬼なんて本当にいるのか。流石坊さんだなあ」

「別に鬼がいるのは、俺が坊主って事とは関係ねえよ」

僧侶は疲れた風に肩を落とした。その様は鬼のようにすら感じられた生臭坊主とは随分印象が違う。色々な顔を持つ人間がいたものだ、と主人は内心で感嘆の息を吐いた。

しかしこうも意気消沈されると、なぐさめてやらねばならない気がしてくるのが主人の生まれつきの気性だった。

「まあもしかすると本物かもしれないじゃねえか。ありがちな鬼の話の本家本元が、西の山の麓の鬼女かもしれないねぞ？」

主人が明るく声を張り上げ力いっぱい僧侶の背を叩くと、彼はむくりと冴えない表情を浮かべる顔を上げた。

「本家本元、なあ」

「そうだ！ それに何だかんだでその話のせいで西の山の麓を通る奴はこの村にはいやしねえ。だからその話が嘘か本当か知る奴はいねえんだよ」

「運が良ければ真実、か」

「ああ。生臭坊さん、博打は？」

主人の人の悪い笑みに、僧侶は軽く笑った。

「嫌いじゃねえな。ナマグサ坊主だから」

「じゃあ鬼女がいるかいけないか、賭けてみたらいい。いたらあんたの勝ち。いなけりゃ俺の勝ちだ」

「なーんかそれって断然俺が不利な気がするんだけど？」

僧侶の顔には人の悪い、薄い笑み。

「気のせいだ。もし本当にいたら、今日の酒代を全額返金してやろう」

「ふうん。俺が負けたら？」

「そうだな……」

主人は少し考えてから手を打った。

「ああ、村の墓地で供養の経きようでも上げてっくれ。この村には坊主がいなくてな。最近じゃ一年に二度、隣の隣村から出張してきてもらってんだ。だから先祖さん達にもすっかり申し訳ない事になっちまってな」

「経？」

僧侶は意外な言葉に大きく目を見開いた。

不利な勝負かと思いきやこの主人はとんだお人好しだ。もう少し自分の利を考えてもいいだろうにと思いながらも、僧侶はにと齒を見せて笑った。

「俺、博打強えよ？」

「上等だ。小僧」

主人と僧侶は拳を打ちつけあって笑った。

「しかし親仁おやし。その性分じゃ商売人は向いてねえんじゃねえの？」

「大きなお世話だ。こんなボロ宿でも先祖代々受け継いできた大事な身代しんだいよ」

そう豪語する姿は僧侶より長い時間を生き、経験し、この旅籠はたしと共に過ごしてきた者の重みがあった。彼が商売人として向いているかはともかくこの旅籠に居心地の良さは感じる。

「……けど損する性分だなあ」

「あ？」

「いや、何でも？」

笑顔で受け流し、僧侶は話を切り替えた。

「それじゃあ明日の朝一番にでも行ってくるか。そこまでは遠い？」

「道はもうないも同然だからな、往復で半日程度かかると思うぞ」

「半日か……」

僧侶は明後日の方を向いて少し首をひねった。

「じゃあその間にもし俺を訪ねてくる奴がいたら、「俺は別嬪べっぴんな鬼女のところへ行っているから大人しく待っている」と伝え

てもらえるか？」

「坊さんの連れか？ 特徴は？」

僧侶は少し考えた後、一息で告げた。

「『生臭破戒似非坊主はいるか』と聞いてきたら間違いなくそういった」

「生臭破戒『エセ』？」

本人にしてみれば不名誉な修飾語がまたひとつ増えているではないか。

主人の不審な目に、僧侶は苦笑して言った。

「そいつ曰く、俺なんか坊主じゃないそうだ」

「……あんたもそれを受け入れちゃっていいのかい？ 一応本気で坊主なんだろう？」

主人は口をへし曲げて僧侶を見たが、彼は胡散臭いまでの笑顔で応えるだけだ。その笑顔に根負けというわけではないが、主人は大きく息を吐いてから頷いた。

それを確認し、僧侶は胡散臭い笑顔を崩し幼子のような笑い顔を向けてきた。

「まあせいぜいぼったくってやってくれよ。常に小金持ち歩いてる奴だから。俺よりずっとむしり取り甲斐がある」

「ほう」

主人の目が、初めて商人らしさに輝く。

それから思い出したように声を上げた。

「そういや坊さん、あんた名前は？ 宿帳に書いてもらった名前、読み方わからなかったんだが」

「ああ、この辺じゃあまり馴染みのない読み方だもんな、俺の名前。多儀はタギって読む」

「タギ？」

耳馴染みのない響きの名前を反芻すると若い僧侶、タギはにっと笑った。

「そ。俺の名前はタギ。よろしくな、親仁」

されこうべと女

長年人通りがなかったという、村の西にある山の麓とやらまでの道のりは、確かに平坦なものではなかった。

朝日が昇ってから村を出、そこから直結している森をひたすら西へと歩いてきたわけだが、夏の近い季節だけに木々は鬱蒼と生い茂り、腰ほどまで伸びた草が行く手を阻む。旅慣れている身とはいえ、体力を削られる道のりではある。

日の光もろくに差さない薄暗い森。

ところどころで感じる獣の気配。

時折姿を見せる蛇。

「野生、って感じだな」

これだけ見事な自然を残しているとは、いっそ感動する。

時の混在する国。

この国がそう呼ばれる理由は、各邑くにごとに時代差があるからだ。

村や町が複数集まって邑。

邑が複数集まって地方。

そして四季に関係なく、常に実が生っているという『護り木』の生えた皇帝の居城周辺を帝都と呼ぶ。

複数の地方と帝都から成るこの国には、時代の流れを留め置いたような地が幾つもある。

タギが昨日宿泊した村などはその良い例だ。

帝都周辺や幾らかの邑は異国の影響を受けて革新的な進歩を遂げているにも関わらず、この辺りの村は未だ昔から変わらない。だがそんな邑は、帝都から離れれば幾らでもある。

それどころか、もっともっと古い時代を留め置いている邑もあるという。

様々な時代を内包した国。それが時の混在する国の由来なのだから。随分長いこと歩き通し、ずっと遠くの木々の合間に光が見え

て森の終着が近いのだと悟るとタギは錫杖しゃくじょうを握り直し、一步一步確実に前へと歩み出した。

旅籠の主人の話では、森を抜ければすぐにその大きな岩はあるらしい。主人も随分昔に人から聞いた話だと言っていたから、現在もその通りかどうかは怪しいが。

「ここまで来て、鬼女どころか岩すらなかったら泣けてくるよなあ」そう呟きながらも、正直期待はしていない。

ああいった村に伝わる昔話の類は大概脚色されている。

古いものであればある程、話も変わってきている。世間話程度の出来事が、人を介して伝わる内、お涙頂戴長編大作になっていることとあるだろう。

真実である可能性など、塵ほどこしかないと言うのに。それでも足を運んでしまう。塵ほどの可能性でも求めてしまう。

「……こうなると癖、だな」

溜め息混じりに呟き、タギは先へ進んだ。

邪魔な草を薙ぎ倒す勢いで歩を進めて行くと、一気に視界が開けた。

「山だ」

少し行った先に広がる、傾斜の険しい山。

森が開けてしばらく歩けばすぐ山か。

「本当に野生だなあ」

呑気にひとりごちながら、タギは辺りを見回した。

「つと。それより岩、岩、岩と」

大きな岩というと人の背丈ほどだろうか。それとも家屋ほどだろうか。

想像を巡らせながら左へ首を回したタギの視界に、赤紅色あかべにが留まった。

緑が濃い季節、場所で異端の色。

風に弄られる、ぼろぼろの薄汚れた赤紅の衣と傷んだ黒髪。

「……本当にいたのか」

口から零れおちた言葉は、風に攫われていく。
苔むした大岩の上にうずくまるようにして座る、赤紅色の小袖の女。

その両手に抱えられた、白いモノ……されうへ髑髏。

タギの声に反応するかのようには、赤紅色の小袖の女の顔が小さく動いた。

「こんにちは」

岩へと近づきながら、タギは笑顔と共に挨拶をした。

近づくにつれ、岩の上の彼女は衣だけでなく髪や顔まで汚れ、長くそこにいた事を窺わせた。「お姉さんが噂の鬼女？」

岩の上を見上げながら、タギは明るく声をかけた。

「……誰ぞ」

低い、敵意の籠もった声にタギは敢えて明るく答える。

「タギ」

「立ち去れ」

会話は不成立。

だがそんなことを気にするほどタギの神経は繊細ではなく、見知らぬ他人より自分を大事にする性格であることも自覚していた。

「聞きたいことがあるんだけどさ」

「立ち去れと言っておる」

「ここはあなたの私有地じゃないんだし、別にいいじゃん」

タギの言葉に女の険しい視線が降ってくる。

だが、赤い小さな唇と口元のほくろが印象的な艶っぽい妙齡の美女だ。肌も髪も衣も傷みきってしまったているが、元は何処ぞの貴族の姫だと言われても納得できる雰囲気がある。

「お姉さんさ、鬼女って本当？」

「……だとすれば何ぞ」

一向に話を聞かない相手に諦めたのか、鬼女は不満げに返してきた。

その返答に、タギの口元が笑みの形に引かれる。

「聞きたい事があるんだ」

「坊主が鬼に？」

女は不審げに聞き返してきた。

「坊主だろうと百姓だろう貴族だろうと、用がある時はあるもんだ」
訳の分からない理屈を述べて、タギは身軽に岩を登り出した。

「来るな」

「ずっと上向いて話すのも首が疲れるんだよ」

いつの間にか女の背後までやってきたタギに、女は振り向いて今まで以上の敵意に満ちた目を向ける。

「そなた、坊主ならば妾^{わらわ}を討伐にでも来たか」

「だから聞きたい事があるだけだって。人の話を聞かないお姉さんだな」

タギは女から少し離れた位置に腰を下ろした。

そして横に置いた錫杖が鳴り、女は不快げに柳眉を顰めた。

「別に俺はお姉さんを退治しに来たわけじゃねえよ？ それに俺、坊主だったって国の認可受けた坊主じゃないし。そんなことより、お姉さんは生粋の鬼？」

「何？」

女は右目を眇^{すが}めた。

「生まれた時から鬼だったのか、それとも元人間の鬼ですかーって聞いたんだよ」

タギは人の好きそうな笑顔で女を見ている。

女はふいと顔を背け、髑髏^{されしうべ}を強く抱きかかえた。

「……違う。妾も元は人」

「そっか」

その声音からは、女の返答に満足したのかそうでないのか推し量れない。

「じゃあ生まれながらの鬼の話とか、何か知らない？」

「知らぬ。そもそも生まれながらの鬼が居るなどということすら知らなんだ」

「まあ珍しいかもな。生まれつきの鬼って」

「本当におるのか？ そのような者」

女は髑髏を抱いたまま、タギを見た。

「いるよ。俺も一人しか見たことないけど」

タギは頷き、空を見上げた。

「鬼なら何か情報持つてるかなって思ったけど、その調子じゃ知らなそうだな」

「……そなた、何故鬼のことなど知りたい？」

女の問いに、タギは空を見上げたまま答えた。

「鬼ごっこをしてるんだ」

「鬼事を？」

「そう。鬼と鬼ごっこをしてる。長い長い鬼ごっこを」

そして軽い笑みを女に向けたと同時に、その話を終わらせた。

「鬼って外観は普通の人間と変わらないから、言われなければ普通わからないあたり、お姉さんみたいな元人間の鬼と一緒にんだけど」

「……そなたは何故人が鬼に変わるのか知っておるのか」

「強い恨み、りんき恠気、絶望……そんな感じのあんまり前向きじゃない感情が過ぎた時に鬼になることがあるらしいってくらいは昔話で聞いたことがある。最近じゃとんと聞かなくなったけど」

タギはさしたる興味もないように、淡々と言葉を紡ぐ。

「何世代か前の旧帝都がこの国の中心だった頃にはそういうのが多かったって聞いたな。千年近く前くらい。嫉妬に狂ったお姫さんが鬼になって男を殺したとかね」

手遊びに錫杖を鳴らす様は、本当に興味も関心もないのだと嫌と言う程わかる。

だからこそ、女には腹立たしい。

「……何も知らぬ者が、知ったように語るな！」

女は髑髏を抱え、初めて立ち上がった。その目は爛々と不気味に輝いている。

「そなたに分かるか。身を焼くような気が狂うような思いがどのよ

うなものか！」

空気を震わすような叫びに、タギは目を見開いた。

「誰が好んで他人を憎むか？ 誰が好んで人を恨み、世を恨むっ？」

誰が……」

女の目に赤い涙が滲む。

「誰が、鬼になどなりたかったものか……」

赤い血の涙が、女の白い頬を伝った。

まさに紅涙か。

「……鬼は血の涙を流すのか」

タギの慰めるでもない、揶揄するでもない、ただ在るがままに発した言葉は空に溶けた。

「どーぞ」

しばしの後、タギは持っていた布を女に差し出した。

女はまだ目に血涙を溜めたままその手を睨みつけた。

「同情なぞいらぬ」

「別に同情のつもりはないけど」

気にする様子もなくタギは布を懷に戻し、再び女から少し離れた場所に腰を下ろした

「とりあえず知った風な口を聞いたことは謝罪する。俺は鬼になったことはないし、人から聞いた話をそのまましてあんたの気に障ったのなら」

「白々しい……」

女は袖で顔を拭いながら、タギから顔を背けた。

その間も髑髏は大事に抱きかかえていた。

「その仏さんさ、供養してやらないの？」

女はタギに背を向けたまま何も言わない。

頑なな背を見て、タギは軽く息を吐いた。

「ま、あんたの自由だけど。何も経きんを上げるのがだけが供養でもないし。大事な奴の側に置いてもらうってのも、一つの供養になるん

じゃないかとも思うし」

「……供養になぞ、なるものか」

「なると思えば何だってなるんじゃない？ 多分」

「こやつは妾のせいで死した者。供養になぞ、なるわけがない……」

血を吐くような言葉。

震える肩。

「……でも連れてるんだ？ その頭だけの人」

「坊主」

「何？」

「そなた、妾を殺せるか？」

女は静かな表情を浮かべ、まっすぐにタギを見た。

「鬼は死なない。殺されない限り、死なない。そして妾は殺されることなく今まで生きてきた」

「死にたいの？」

細い指先でそつと髑髏を撫で、女は言った。

「鬼は生者とは違う。死んして尚、生きる者」

「言葉、変じゃない？」

「黙って聞け。小僧」

女に迫力ある睨みを効かされ、タギはその口を閉じた。

「これを死と言ってもよいものか……叶うのなら鬼としての妾を、終わりにしたいとは思うが」

「明確に死かどうかは別ってことか」

「ひと昔前までは陰陽師やら坊主やらがわらわを討伐に来た。だが誰も妾を殺せなかった」

「殺させてやらなかったんじゃないくて？」

「妾は何もしておらぬ。あ奴らに妾を討つ程の力量がなかっただけのこと。そして皆勝手に逃げ帰って行きおった」

驕りでも自賛でもなく、ただの事実として女は語る。

「それで人食い鬼女の話が広まったってわけか」

タギの言葉に女は答えない。

「ま、それはいいとして。お姉さんは強い鬼？」

「恐らくは」

「そっか」

さっぱりとした声でタギは頷き、白い雲の流れる鮮やかな青空に手を伸ばした。

女はその様子を見ながら、新雪よりも白い髑髏に視線を落とした。

「小僧」

「タギ」

「……ではタギ。先程の質問に答えよ。そなたは妾を殺せるか？」

タギは女を見て表情なく、だがはっきりとした声音で言った。

「多分」

「……そうか。では妾を殺してほしい。そしてその後、こやつを供養してやってほしい」

そう言って女は両手に抱えた髑髏を差し出した。

「それはお姉さんの大事な奴？」

「ああ……とても。長い間、妾の勝手でこのような姿で在るが」

古ぼけた髑髏はもう随分長い間、女と共にあった。

いつ土に還ってもおかしくない程に長い間。

「さっきも言ったけど、経を読んで格式ばった儀式をすることだけが供養じゃないと思うけど」

「妾はこの世に留まる限り、こやつを手放せない。妾が居なくなるまで、こやつに安寧などない」

「……聞いてもいい？」

「何ぞ」

「俺も一応坊主の端くれとして、出来るならそいつの望む供養をしてやりたいと思う。だから、話してくれないか？ あんたとそいつに何があったのか。せめてそれを聞いてから判断したい」

初めて真剣みを帯びたタギの声に、女は目を伏せた。

「話せば妾を葬り、こやつを供養してやってくれるか？」

「ああ。約束する」

女は一度顔を上げてから、また軽く目を伏せた。

「何から……話せば良いか」

鬼の女と人の男

愛した男がいた。

親に勧められた結婚相手だったが、優しく聡明なその男に女は恋をした。

女は男の正室となり、男は当初こそ美女として誉れ高い女に構っていたが、やがて飽きて若い女を側室に迎えた。

女は嫉妬に駆られた。

毎日毎日念入りに化粧をし、衣を選び、夫が訪れるのを待った。だが夫が自分のもとを訪れなくなって、季節は幾つ変わった頃だっただろうか。

初めて側室の女と顔を合わせた。

以来、嫉妬の念が昼も夜もなく女を支配した。

気付けば女は夫を殺し、人の血肉を食らう鬼と化していた。

屋敷を追われ、都を追われ、落ち伸びた先で女は鬼として生きた。多数の鬼や物の怪達と顔を合わせることがあり、時には縄張り争いにもなった。

——それから時を経て。

女は近辺の鬼達を統べる存在になっていた。

他のどの鬼よりも非道。

他のどの鬼よりも血を好む、恐ろしい鬼女として。

鬼の御殿ごてんと呼ばれる鬼の住処すみかで女は日々を過ごした。

気が向けば人里に降りて人間を襲い、時には迷い込んだ人間をたぶらかし最後には食ってしまった。

そうして彼女は若い時分の頃と変わらぬ姿で、周囲の時ばかりが過ぎて行った。

それでも時折、鬼を討ちに來た者。

財宝があるという噂に誘われてきた者。

噂の鬼の美女を拝みに來た者。

そのような者達が御殿を訪れ、鬼女を退屈はさせなかった。

だがある夏、そのどれにも当てはまらない者は訪れた。

その男は風体から貴族なのだろうと察せられた。まだ歳は二十を幾らか数えた程。

鬼の鍛えし刀は強力無比。人の鍛えた刀とは比べ物にならない硬度を持ち、呪力を宿す。

そのような根も葉もない噂を耳にした者だった。

鬼女は常のように、男の警戒心を解くように手厚くもてなそうとした。

今までの男達はどれほど強い警戒心を持っていようと自分が少し笑いかけ、酒と香に惑いすぐに警戒を解いてしまったのに、その男は違った。

ナマクラ。

そうとしか言えぬ太刀を、笑いかけた鬼女の首元に押し当てこう言った。

「どんな名刀よりも強い刀を造れ。どんな剛の者をもねじ伏せることのできる呪力を持った刀を」

ナマクラ刀を手に、男は不遜に言い放った。

その無礼な男の名は永久と言った。

その場で食い殺すことも、他の者達に惨たらしく殺させることも出来た。

だが、そうする気にはならなかった。

その男の目は今まで見た誰よりも強く、誰よりも貴き光を持っていた。

だから、興味を引かれた。

その日から永久は御殿に居座り始めた。

御殿に仕える者たちはいつでも永久を狙っていたが、男は鬼除け

の符を持っていて力の弱い彼らには手出しできなかった。

「お前が此処の主ということは、一番力が強いのだろう。お前が刀を鍛えろ」

端麗な容姿とは裏腹に永久は言葉が悪く、態度は横柄。もっとも鬼である自分相手だからかもしれないが。

だが不思議とそれを厭うどころか、可笑しくて仕方がなかった。

「なぜ妾が人間ごときの言など聞かねばならぬ」

そう笑って言ってやった。

「よう聞け、童^{わらわ}。確かに妾に仕える者たちはそなたの持つ符により手を出せぬ。だが妾は違う。いつでもその符を焼き捨て、そなたを食い殺すことなどたやすい。それを忘れるな。そなたは妾の遊びで生かされている。飽けばいつでも喰う。それが厭だと申すのなら、早々にそなたの屋敷へと逃げ帰るがよい」

十年、二十年生きた程度の童と、その数倍もの時を生きてきた自分とが対等であるわけがない。その時はまだそう信じていた。

豪華な赤紅の衣に映える、流れるような緑なす黒髪の、自身の名すら忘れた鬼女は。

それでも永久は御殿に留まった。

御殿の主である鬼女の命により男は客人扱いされ、一応の食事と寝所を与えられた。

だが、それもいつまで持つか。

鬼女は御殿の者たちとそのような賭けをしたりして過ごした。

当の永久はと言えば、日中は外に出て何をするともなく過ごしたり、日に一度は必ず鬼女のもとを訪れ、刀を鍛えろと迫った。或いは鬼女の暇つぶしに貝覆いなどの遊びに付き合わせた。

それが日常となったある日、女は永久が常に腰にさしていたナマクラ刀を壊した。

これで男に残ったのは、貧弱な符だけ。

さて、これでいつまで持つか。

すぐさま逃げ帰るだろうと思ったが、永久はまだ屋敷に留まった。容姿だけの人間だと思ったが、どうやら最初に見た瞳の強さは本物だったらしい。

いつからか、鬼女は永久に強い興味を持っていた。

今までに見たことのない面白い人間。

退屈な日々を変えた、奇妙な人間。

「名は？」

ある日、唐突に永久が訊いてきた。

戯れに庭を歩いていた時のことだった。

「名？」

言われた意味がわからず、訝しげに鬼女は聞き返した。

「そうだ。お前の名は何と言うんだ？」

その時初めて気づいた。

自分が人であった頃の名を、もう思い出すことも出来ぬほど昔に忘れたことに。

誰もが女を主と呼び、或いは鬼と呼び、誰も自分の名を知らぬことに。

自分に仕える者達も、目の前のこの男も名があるのに、自分にはない。

「……ない」

「ない？」

今度は男が訝しげに眉を寄せた。

「妾に名などない。人であった頃の名など疾うに忘れた」

永久に背を向け、鬼女は屋敷へと歩き出した。

今をどのような顔でいればよいのかわからず、そしてそれを永久に悟られたくはなかった。

ふいに、背に声がかかった。

「不便だな」

「……別に不便などない。これまで一度も必要としたことなどなか

ったのだから」

そう。必要ない。

誰も自分の名を呼ぶことなどない。

続けるべき身の自分と対等な立場に立つ者などいないのだから。

だが、永久は続けて言った。

「不便なのはお前じゃない。俺だ」

「何？」

思わず振り返ると、永久は不遜なまでに堂々と言い放った。

「お前を呼ぶ名がないのは不便だ」

「今までのように『鬼』とでも『鬼女』とでも呼べばよいであろう。
何が不便か」

「不便だ」

訳のわからない押し問答の末、永久は言った。

「お前は名に興味がないのだから、俺がつけても文句はないな」

永久は不遜な笑みを浮かべた。

「そなたごときが妾に名を？」

「そうだな。お前は俺よりもずっと長きを生きていると言うし…」

鬼女の言葉など無視して永久は勝手に考え出し、そしてしばらく
して顔をあげた。

「八千代やちよでどうだ？」

「……八千代」

反芻はんすうし、つい思ったままの言葉が口から洩れる。

「悪く、ない」

そう言った時の永久は見慣れた不遜な笑みではなく、見たことも
ない穏やかな笑みを浮かべていた。

それが、最初に永久からもらったもの。

それから永久は自分を八千代と呼ぶようになり、自分も男を永久、
と名で呼ぶようになった。

八千代と呼ばれることは、今までにない不思議な心地よさがあっ
た。

それは鬼になってから、否、それより以前から長らく忘れていた感覚だった。

永久が屋敷を訪れて一月半。季節は夏から秋へと移り変わろうとしていた。

八千代と呼ばれるようになってからも永久は毎日、八千代の使う寝殿しんでんを訪れる。

もっともそれは人間の男女のように恋情から夜這うものではなく、昼間から堂々と刀を鍛えろと言うためだった。

ある日、疑問に思った八千代は聞いた。

「何故、刀が欲しい？」

その答えは実に簡潔だった。

「これから戦が起こるからだ」

「永久も戦うのか」

「さあな。だが可能性がある以上、ないよりはあったほうがいいだろう」

大した興味もなさそうに、永久は言った。

「そなたは身分ある者であろう。戦うのはそなたよりずっと身分の低い者たちではないのか？」

「時代が大きく変わろうとしている」

「どういう意味ぞ？」

「今は貴族を中心として世は回っているが、次期に武人として生きてきた武士達の世になる。その前に、貴族と武士との間に戦が起きるだろう。世の転換期とはそういうものだ」

「ならば、そなたが妾に刀を鍛えろと言うのは生き延びるためか」

「そうだ。父上がな」

自嘲気味に笑い、永久はそう言った。

「俺は父上の命で鬼の呪力を持った太刀を持ち帰るため、ここに来た」

「……あの程度の符とナマクラ刀だけを持たせただけでこの鬼の御

殿へ、か？ そなたの父は子殺しの趣味でもあるのか？」

「そうだろうな」

趣味の悪い冗談のつもりで言った言葉は、あっさりと肯定される。永久は遠くを見て笑って言った。

「俺の妻は都でも美女としてもてはやされていて父上もえらくご執心なのだが、俺がいると言い、妻は父上を受け入れない。だから父上は俺が邪魔になった」

その時の衝撃を何と表わしたらいいのか。

永久とその父の確執よりも、彼には契りを交わした妻がいた。それだけが頭を巡った。

当然と言えば当然だ。彼の歳ならば妻の一人二人、いてもおかしくはない。まして身分の高い貴族の子息であり、これだけ容姿に恵まれているのだから。

遠い昔、人だった頃の記憶がふいに蘇りかけて慌てて頭を振った。うまくまわらない頭で、言葉だけが口から零れ落ちた。

「妾は……刀を鍛えることはできぬ。だが、呪力を施すことはできる」

言葉だけが感情を伴わず、勝手に紡がれる。

「刀を鍛えることの出来る者と呼んでやる。その者が鍛えた刀に、妾が呪力を施してやる」

衣擦きぬずれの音とともに八千代は立ち上がり、欄干らんかんから庭へと目を遣った。

「誰か……刀を鍛えよ」

小さく零れた言葉に応えるように、庭に風が舞い上がる。現れたのは猛々しい大男。

「一振り、この人間に合う刀を鍛えよ」

大男は永久に目を遣った後、一礼して姿を消す。

「……明晩には仕上がる。それから妾が呪力を込める。明後日の朝には、そなたは帰れ」

永久に背を向けたまま、八千代は告げる。

「……どういう風の吹きまわしだ。今まで頑として首を縦に振らなかったのに。そんなに俺が憐れになったか？」

「鬼が人間を憐れむわけがなからう。思い上がるな、童。これから我らの好む血が流れるという楽しき報せをくれた礼じゃ」

そう。鬼女たる自分は何より血肉を好むのだから。

「楽しみよのう……」

そう言った八千代の声は、やけに空しくいつまでも響いた。

八千代と永久

「あの者に刀を与えるとは真ですか？」

若い男の姿をした鬼は八千代を見上げて尋ねた。

八千代は答えない。ただまっすぐ、朱に染まりつつある空を見据えている。

「喰ってしまえばよろしいではないですか。近頃は主も肉を食されておられないでしょう」

「肉は飽いた」

落ちた言葉に、鬼は渋い顔で呟いた。

「……主は変わられた」

「そうか」

遠い眼で沈みゆく夕陽を眺め、そう答えた。

そして沈黙と共に夜が訪れる。

鬼は本来、食糧を必要としない。

血肉はあくまで嗜好品にすぎず、必ず摂らねばならないものではない。

何重にも纏った衣もそのままに、八千代は寝台に横になった。眠れない。

本来なら眠る必要もないのだが、今は眠ってしまいたい。

何も考えずにすむように。

堅く瞼を閉じ、そう願う。

こんなこと、長い記憶の中にただの一度もない。胸が苦しくて、閉じられた瞼が熱い。

「八千代」

夜闇の静寂を破るよく通る声に八千代は顔を上げた。

母屋の外から聞こえるのは、この屋敷に唯一の人間の声だ。

「……まだ、刀なら出来ぬ」

「知っている」

「ならば疾く去れ。そなたに貸し与えたのは東対ぞ」

だが気配は去らない。それどころか、勝手に襖障子が開く。

八千代は体を起こし、そちらを見た。

「……何か用か？」

「何故、泣いている？」

影は八千代の問いには答えず、彼女の眼尻に触れた。

濡れた感触。

「泣いて……？」

その時初めて八千代は自分が泣いていたことを知る。鬼と化した身である己が泣くことが出来るということも、この時初めて知った。

「……知らぬ」

何故泣いているのかなど、こちらが知りたい。

「何故、妾は泣いている」

「自分のことなのに、わからないのか？」

「今まで泣いたことなどなかった」

自覚した途端、涙が溢れてくる。

嫌だ。永久には見られたくない。見えなくとも嫌だ。

八千代は俯き、低く声を発した。

「……去れ」

「嫌だ」

「去れ。喰われたいか」

「それをお前が望むなら、それでもいい」

一体何を言っているのか。ようやく念願だった刀が出来上がろうとしているというのに。

「……莫迦か、そなたは」

「莫迦でいい。だから泣き止め」

「止め方がわからぬのだ！ 妾のすることに文句があるのならば去ればよいっ！」

強引に永久の手を振り払い、八千代は肩で息をする。

――何故泣く。

鬼である自分が。数多の鬼たちの主である自分が。人であることを捨てた身で。

「……っ」

ふと、頬に温かな感触があつた。

すぐ間近だから気付いた。

震える自分の手の上に重ねられた手と、流れる涙に触れる唇に。

驚いて八千代は身を引こうとするが、重ねられた手がそれを許さない。

「何を……っ」

「泣き止まないからだ」

睫毛が触れそうなほどの距離で、そう言われる。

「うるさいっ！ そなたには関係ない！」

堅く目を閉じて、その強い瞳から逃れる。

「気に入らないなら喰えばいいだろうに」

淡泊な、感情が見えない声。

「うるさい、うるさいっ！ それ以上余計なことを申してみよ！」

刀などくれてやらぬ！」

「なら、刀などいらない」

思わず目を開いてしまった。

目の前にはまっすぐな永久の瞳があつた。

「そなたは……何を考えている……？」

最初からよくわからない人間とは思っていたが……。

「刀がいらぬなら、何故まだここにいる？」

「欲しいものがある」

「……財宝か。そのような物、そなたの父がいくらでも持っていたよ
うに」

「そんなものはいらない」

「それでは、な……」

それ以上、言葉は続かない。唇を塞がれ、寝台に倒れ込む。

「八千代が欲しい」

「な……に……」

「それ以外いらない」

また唇を塞がれる。

「……っ 離せ！」

今までに多くの人間を切り裂いてきた長い爪が永久の肩に食い込む。

熱い血の感触。それでも永久は離さない。

爪は骨にまで達する。痛みがないわけなのに、血が溢れ出ているのに――。

先に折れたのは八千代のほうだった。

そっと肩から手を離れた。

「莫迦が……殺されるつもりだったのか……？」

「それでも悪くなかったな」

今や永久の衣の上からも流れる血の感触がする。

「妻が泣くぞ」

「泣かない。他にも言い寄る男は山といるからな」

「だが大事なものはそなたなのだろう……？」

「方便だ。貞淑な妻を演じて、家に取り入れるための。あれが大事なのは俺じゃない。権威だ。父を受け入れないのは、もう五十近いあのガマのような男が生理的に受け入れないからだ」

今まで聞いた中で、一番淡々とした声。

「……他に側室を迎えてるなり、離縁して別の女を選ぶなりすれば良いものを」

遠い昔の記憶が掠れるように蘇り、八千代は目を伏せる。

だが、永久は言った。

「俺は器用な性質じゃない。ご機嫌伺いの妻を何人も迎えても面倒なだけだ。皆実家のため、俺の家と縁を結びたいだけだ。そんな女を相手にするのは疲れる」

変わった男だ。

貴族の男など、多く妻がいればそれに越したことはないだろうに。

「八千代が都にいれば良かった」

静かな永久の声に、八千代は絞り出すように言った。

「妾は都なぞ嫌いだ」

「同感だ」

そう言って小さく笑った。

「八千代」

「……何ぞ？」

「俺の血も肉も命も全部やる。だから代わりに俺にお前をくれ」

「……本当に大莫迦だ。鬼を相手にそんなことを言った物好きはあなたが初めてだ」

いつの間にか涙は止まっていた。

「肩を貸せ」

まだ血の溢れ出る肩を強引に引き、八千代は傷口に唇を寄せる。

触れた場所から傷口はふさがっていった。

傷口から流れ出た血は全て飲み干す。

「血肉も魂も今はこれ以上いらぬ……」

その言葉はもう一度塞がれた唇に呑みこまれた。

それから時代は永久が言ったように変わり、貴族社会もまた大きく変わったと聞く。

八千代と永久は御殿を出、鬼も人も足を踏み入れない、静かな山奥で暮らし始めた。鬼であることなど忘れてしまいそうなほど、静かな時を過ごしていた。時には二人の気に入りの眺めの良い岩に登って二人空を見上げ、穏やかな日々を送った。

ただただ、平穏で静かな日々を。

だが、それは起こった。

気に入りの岩の前での、一瞬の出来事。

大地に平行に走った一瞬の煌き。
そして朱に染まる。

ただ茫然と立ち尽くした。

「永久………」

首だけになってしまったとおしい者を抱き上げ、抱え込む。

八千代を見下ろすのは、憎悪と嫌悪に染まった複数の人間たちの目。

「まさかこんな所に鬼がいるとは」

「危うく食われるところだった」

「あんたが教えてくれなかったら危なかったよ」

そう言って男達が視線を向けたのは、血に染まった刀を携えた人の姿をした、鬼。

かつて八千代を「変わった」と称した、あの鬼。

何故、人に紛れている？

何故、此処にいる？

何故この者が、永久を……。

人に紛れた鬼は静かに八千代に近づき、耳元で囁いた。

「貴女がいけない。このような人間などにほだされるから」

柔らかな声にどうしようもないほどの嫌悪を覚え、背筋が震えた。

「こっちの女は？ あんた、もしかしてこの鬼に攫われてきたのか？」

「可愛そうに……何処の村のもんだ？」

「どうした？ 口がきけないのか？」

かわいい、そう？

誰が……？

「この女は私の伴侶となるはずだった者。連れ帰ります」

鬼は人のふりをして、醜悪な笑みを作り女の手を取ろうとした。

刹那、鬼の体から血が吹き出す。

「うわあああっ！ お、鬼だ！ この女も鬼だっ！」

長い爪が、かつての同胞の血に染まる。

「こ、殺せっ！ 鬼とは言っても女だ！」

「鬼どもが！ 二匹もいたとは……！」

八千代を取り囲む、悲鳴と怒声。

そこまでしか、覚えていない――。

気付けば辺りには赤い池が出来ていた。

八千代自身も赤く染まっていた。

「な……がひ……さ……」

もう二度と自分を呼んでくれない、抱きしめてくれなくなった彼をもう一度抱きしめる。

すると涙が零れた。

「永久……永久……永久……永久……」

幾度名前を呼んでも、彼はもう二度と答えてくれない。

その事実には涙は溢れることなく流れ、いつしか血の涙を流していた。

声が枯れても泣き叫び、ずっと彼の首を抱えていた。

静まったのは、何度陽が昇った頃だったか。

「永久……そなたは言ったな。そなたの血肉と魂をわらわにやる、と」

代わりに永久は八千代を得た。

「あの日の誓い、今果たしてもらおうぞ……」

いとおしい人。

その血肉すら、誰にも渡したくない。

ひとり、ただ朽ちていくだけなど許さない。

「妾は鬼だから……そなたを全てもらい受けるぞ」

哀しい血肉の感触。

かつては好んで食したモノなのに、涙は止まらない。

唇から血を滴らせ、鬼女と呼ばれた女は泣く。

枯れることを知らぬ血の涙はいつまでも流れる。

「せめていつか、妾が滅ぶ時まで、側にいて……」

きつとこの血にまみれた身は、清い貴方と同じ場所へは行けぬから。

いつか自分が殺される日まで、側にいさせて――。

「永久……」

白い骸を抱き、鬼女はかつて二人で過ごした岩の上で泣いた。
気が遠くなるほどの長い時を、愛しい人の骸を抱いて。

おやすみ

女——八千代が話し終えても、タギは一言も発さなかった。

八千代もまた、話し終えたきりだった。

緩やかな風が、顔を伏せた八千代の長い髪と赤紅色の衣を揺らす。

「……話は終わった」

風が止み、八千代は顔を上げてタギを見た。

「今度はそなたが約束を果たす番ぞ」

彼女の枯れ木のように細い手には白い白い、永久の骸。

話を聞いた限り、彼女は数百年単位でこの場所に座り続けていたことがわかる。この骸もよく今まで、風化して朽ちずに彼女と共に在ったものだ。

タギはそのぽっかりと空いた眼窩がんかを見てそう思った。

八千代は焦れたようにタギを呼ぶ。

「タギ」

「……俺は意外とリアリストなんだよな」

唐突なタギの言葉に、八千代は困惑に眉をひそめた。

「何を申しておる？」

「だからそのされこうべ、それに魂が宿ってあんたを見守っていたとか、そんな可愛らしいことは思わないんだよ」

錫状を手に取り、タギは続ける。

「奇跡的だとは思うけど。今までずっとこの風の吹きさらす岩の上にあって、形を留めて何百年もあんたの手の中にあたって言うのも」

タギの口調は淡々としたもの。

感情も何もない、ただ事実だけを語るもの。

「……何が言いたい？」

八千代ははっきりとしないタギを睨んだ。

「人は時に、幸福な偶然を運命と呼ぶ。だったらあんたの手の中で

今も形を留めてるあんたの旦那のことも、運命と呼んでいいんじゃないか？」

揺らした錫杖がしゃらんと涼しげな音を立てる。

「幸福な偶然が運命……」

「そう思ったほうが、一つひとつの繋がりがより大事なもんだと思えるから、俺はそう思うだけの話だけど」

零すように言ってから、仕切り直すようにタギは張りのある声で続けた。

「約束だから旦那の供養はする。けど、あんたと離れ離れにするような供養をしたら、逆に俺があんたの旦那に崇られるような気がしてきた」

「何を莫迦な……！」

叫びかけた八千代を遮り、タギは続ける。

「あんたのせいで旦那が死んだって思ってるみたいだけどさ、鬼と暮らしてどんな目で見られるかなんて旦那だってよく分かっただろ？ それでも旦那はあんたと暮らすことを選んだ」

八千代は手の中の髑髏さるこに視線を落とした。

「地位を約束されていた……って言っても時代的に貴族もヤバかったか。けどまあうまくやればジジイになっても贅沢に暮らせただろうよ。けど旦那はそれを捨てたんだ。地位と財産を保障された生活より、危なっかしい鬼女といることを選んだんだろ」

どこまでも淡々と。

八千代に言い聞かせる気などさらさら感じさせず、ただ自分の感想を述べるだけのようになタギは話す。

「あんたが旦那を手放せなかったように、旦那もそうだったんじゃないのかって俺は思った。だから供養するなら、あんたと離れ離れにならずに済む方法で、だ」

「……妾は」

八千代は手の中のされこうべを、壊れそうなほど強く抱きしめた。「こやつを不幸にした」

ぽたぽたと、赤い雫が白いされこうべに零れてゆく。

「妾と居たばかりに、永久は殺された」

赤い涙が止め処なく零れ落ちる。

「妾が居ては、永久は幸せになれない……！」

遠い昔に枯れ果てたと思つた涙が、思い出したように溢れてゆく。
いつか自分が消え去る日までせめて。

そう思い、罪悪感と共に彼をこの手に抱いていた。

もう一体いつからそうしていたのか思い出せないほどの時間を、
そうして過ごしてきた。その間、消えることのない罪の意識が当たり
前のように染みついていた。

「……別にあんたが決めることでもねえんじゃない？ そいつが幸せ
かそうでないかなんて」

赤い涙に染まる目で、八千代はタギを見た。

タギは相変わらず錫杖を弄びながら、八千代を見ることすらしない。
い。

「他人がどう思おうが、自分が幸せって言ったら幸せだって奴なんて
いっぱいいるしさ。俺が見てきただけでも、惚れた女に騙されて
文無しにされても幸せだって言い張った奴とかいたし、他人からは
哀れみの対象にしかなくてなかったけど。でも別に本人がいいなら
それでいいんじゃないかって」

シャラシャラと音を立て、錫杖が鳴る。

「自分が幸せかどうかなんて、自分で決めればいいんじゃない？」

自分がいいって言ってるのに、他人に否定されたら気分良くないし」

シャランと一際大きく音を立て、錫杖はタギの手で静まった。

「まあそれが俺の信条だから、本当は俺もその頭だけの旦那がどう
思ってたかなんて口出すのもあれなんだけどさ」

不本意そうに口を歪めてタギは言う。

「けど俺はやっぱり自分のが大事だし、何か崇られそうな気がして
堪らないのを黙ってるのも気分悪いんだよなあ」

どこまでも自己中心的な男。

呆れが長年の後悔と自己嫌悪に勝ったのだろう。気づけば八千代の涙も止まっていた。

「そなたは……何を考えているのかまるで分からぬ」

するとタギは不思議そうな顔をして八千代を見た。

「だって分かってもらえるほどの付き合いじゃないだろ？ 俺達」

全くその通りだ。その通りなのだが、これほどまでに己を通す者など、永久以来初めて見た。

「酔狂な坊主ぞ」

そう漏らした声は、微かに柔らかな物。

八千代自身は気づいてもいなかったが、確かにその顔には零すような笑みが浮かんでいた。

「鬼と鬼事をしているとほざいたり、説法かと思えば己の理屈ばかり。今までそなたのような坊主は見たことがない」

「うん。俺ほど善良で慈悲深くて懐の深い、清く正しい男は国中探してもまずいないな」

真顔でそんなことを言うタギに八千代の目が大きく見開かれ、それから笑い声が漏れる。

「ふっ、あはははは」

おかしな奴。

確かにいやしない。

こんな馬鹿な坊主、探したとてあの世にもこの世にもいないだろう。

「……美人のお姉さんの笑い顔を見れるってのは悪い気分じゃねーけど、自分がその笑いの対象になると思うとアレだよな」

タギは目を据わらせて八千代を見ていた。

その顔はまるで幼子のように。

本当に妙な人間だ。

大人のようで、子供のように、そのどちらでもあるようで。

「ふふっ……済まぬ。しかし声を上げて笑ったのなど一体いつ以来のことか」

「あー良かったねえ」

棒読みに言うタギに、また笑みが込み上げてくる。

「しかし……そなたは良い坊主になれそうだな」

「それはドウモ」

よほど笑われて気に障ったのか、タギはすっかり仏頂面に棒読みだ。

外観は明らかに二十歳程度の男だと言うのに、その様は拗ねた幼子のようにしか見えないからおかしい。

「長年の、重い何かを下ろせた気分だ」

その手に抱えるされこうべを見て、そう呟く。

「……タギよ。妾は永久と共に逝っても良いと思うか？」

タギは少し不思議そうな顔をしてから、躊躇いなく答えた。

「俺は知らないさ。あんたらの事、聞いただけで実際には知らないし」

あっさりと、迷いなくそう言ってのける。

「そうか」

ほんの一刻も経たぬ時間を過ごしただけの相手なのに、実にタギらしい答えだと思ってしまう。

他人を救う気は殆どない。

己の言葉を口にしてもそれを押しつけようと言うわけではない。

「……良い坊主にはなるやもしれんが、万人受けする坊主ではなさそうだな」

「万人に無条件に受け入れられるモノなんて、この世にあるの？」

「ないな」

万人受けどころか、どちらかと言えばタギは敵も作りやすい性質だろう。

だが少なくとも――。

「妾はそなたに少しばかり救われた。礼を言う」

初夏の新緑の香の風が八千代の髪を揺らし、タギへと吹き抜けて行った。

「一体どれほど振りのことか……とても、清々しい気分だ」

「そりゃあ良かった」

八千代の呟きに、タギはほんの少し相好を崩した。

「……そなたは善人か悪人か、よく分からぬな」

「決まってるだろ？ 一分の隙なく世界始まって以来の善人だ」

胸を張って行ったタギに、八千代はまた笑った。

そしてタギも笑い、真っ直ぐな眼差しを八千代に向けてきた。

「もう一度だけ聞いておこうか？ 本当にこれでおしまいでいい？」

「……ああ」

八千代は儚げな笑みで、だがしつかりとした声音と共に頷いた。

「そして叶うことなら……永久と共に逝きたい。可能か？」

「鬼を討つのは少しばかり乱暴な手段になる。まあ分かりやすく言うなら、お姉さんと旦那を一緒に斬るとかな」

「……ではせめて、その後に永久のために経を上げてやってくれぬか？ 最期の時まで妾は永久と共に在りたいのだ。だがせめて、妾が滅んだ後は……」

「お姉さんと旦那のために、俺が心を込めて経を上げてやるよ？」

八千代の懇願にも似た言葉を、タギはどこか意地の悪い笑顔と共に断ち切った。

「次の夜の世界が穏やかなものであるように。本来なら金を取りたいところを無償でお姉さんと旦那を供養してやるよ」

「次の、夜の？」

八千代が目を丸くして聞き返すと、タギは「知らない？」と言って逆に驚いてみせた。

「ああ、この辺りじゃそういう話はないのか。この世で死んだ魂は夜の世界へ行くんだってさ。そして次は現つの世界へ、そして次にまた今のこの世界へ戻ってくる。そうして魂は三つの世界を巡り続けるらしい」

穏やかな耳に心地よい声が語る。

「生前の業によっては例外もあるらしいけど。殺生とか自害とか」

「……初めて、聞いた。仏道にそのような教えがあるとは知らなんだ」

「あ、今のは仏教じゃねえよ？」

「そなたは仏道を修める僧侶ではないのか？」

八千代は目を丸くして聞き返した。

「一応ね。でも今のは俺がガキの頃聞いた話。俺は魂とか死後の世界とか、自分で見たことないものって信じない派なんだけどさ、この話だけは少し信じてる」

「信じないのに、か？」

「うん」

それ以上聞かせる雰囲気も作らせず、タギは立ち上がって錫杖を地につけた。

八千代は長い時を共にした髑髏を胸に抱いた。

「何にしても、永久とはこれで今度こそ別れだな。妾は罪を犯し過ぎた。否、永久はとうの昔に何度も生まれ変わっておるか……」

「魂を焼かれるような裁きを受けてそれで改心出来るようなら、もしかしたらどこかの神様とかそういう偉いのが、次の世へ行かせてくれるかもよ？」

救いとも、慰めとも知れない言葉だ。

ましてこの胡散臭い坊主のこと。当てにはならない。

ならないが――。

「そうなれば、良いな」

「ま、それ以前に魂なんてものが本当にあるのかも怪しいけど」

ぼそりと呟いた言葉が、全て台無しにする。

本当にこの男は何がしたいのか……。

「そなた、妾を慰めるつもりか？ それともいたぶるつもりなのか？」

八千代が睨めつけると、タギは何度も目を瞬かせ、当然のように答えた。

「まさか。別にどっちも全然そんな気ないけど？ ただ俺は思った

ことを言っただけで」

「……全く。そなたは永遠に妙だと言い続けても足りぬくらい妙な男だ」

八千代は額に手を当て、息を吐いた。

「だって変に期待持たせても悪いかと思って。お姉さん執念深そうだし、もしこれで化けて出られることでもあつたら怖いし」

「そなた、魂があるかも分からぬと言ったばかりではないか」

「うん。分からないから無いかもしれないし、あるかもしれないだろう？」

確かにその通りだ。

その通りなのだが。

「……そなたは間違はなく大物になる。鬼女をここまで困惑させた男なぞ、そうはおるまい」

「俺はしがない小市民でいいんだけどな。大物なんて面倒くさそうだ」

「口の減らぬ小僧よ……だが、お陰で退屈せずに済んだ」

「うん」

タギは錫杖を握り直し、八千代を見た。

「魂が縁を結ぶと、次の世界でも縁を結ぶ可能性が高いんだってさ。これも昔聞いただけの話で、信憑性はないけど」

「ならば、永久ともまた出会える可能性はあるということか」

「正確には旦那だった別人だけだな」

「いちいち可愛げのないことを申すな」

「性分で」

シャラリと音がして、錫杖が八千代に向けられる。

「それじゃあお姉さん。次があるなら、今度は常夜の世界だ」

「ふん。わらわに次なぞあるものか」

悪態を吐きながらも、八千代の表情は穏やかだ。

タギは一度、大人でも子供でもないような透明な笑みを浮かべた。そして彼女と、彼女の伴侶へ最期の言葉を送る。

「おやすみ」

それに応え、八千代も笑った。

花のように、柔らかに穏やかに――。

風を切る音と共に、硝子が碎け散るような音がした。

そしてタギの耳に届いた声は本物か、空耳かは分からない。

――有難う。

若い男女の声のようにも聞こえたが、気のせいかもしれない。

だが、もしかすると気のせいでもないかもしれない。

「……おやすみ」

もう一度、常夜の世界への手向けの言葉を送り、短い経を読み上げる。

そして顔を上げ、かつて髑髏を抱いた鬼女の座した苔むした岩を空を切って降りた。

終幕

森を出たところで空を見上げると、薄青色の空は橙色に染まりつつあった。

「……けっこうかかったな」

往復に半日かかると言われ、早めに出たというのに。予想以上にはびこった森の木々や草のおかげで、必要以上に時間を食った。

「腹、減ったなあ」

そう言えば旅籠の主人との賭けには無事勝ったわけだ。酒代も帰ってくるのだし、今夜も楽しく飲むとしよう。

だが、鬼がいたと証明できるのはタギだけだ。

もうあの岩へ行っても鬼はいない。

人の好い主人のことだから疑うことなく酒代を返してくれるのだろうが、あまり繁盛している風でもない旅籠からこれ以上ふんだくるのも流石に気が引ける。

けどもう一晩くらい、あのなかなか美味しい地酒を飲んで明かしたい気もするがどうしたものか。

「――タギ！」

村の入口の古びた注連縄しめなわの巻かれた道祖神どうそじんの隣に、見慣れた顔がある。

薄花色うすはなの小袖に、結わずに垂らした長い髪。

「オト」

彼女はタギの姿を認めるなり肩を怒らせ、大股でこちらへと歩いてくる。

「遅い！」

腰に両手を置いて、仁王立ちになって旅の連れは怒鳴りつけてくる。

「遅いってお前……自分が野宿は絶対嫌だから、前の村で泊まるって言って俺だけ先に行かせたくせに」

「口応えするな」

「痛ててて」

彼女、オトはタギの足を思い切り踏みつけ、板についた高慢な仕草で鼻を鳴らす。

「鬼は？」

「確かに別嬪べっぴんだったぞ？」

「別嬪でも醜女しこめでもどっちでもいい。何か話は？」

「あーっと。悲恋？ そんな感じの話聞いたな。そういうの好きだろ？ お前くらいの年の女って。後で話してや……」

「結構！ つまり収穫ゼロと。一人で勝手に動いて人を待たせておいて」

不機嫌にオトの目が細められる。

相変わらず理不尽だ。

内心溜め息を吐いたところで、ふいにタギは顔を上げた。

「あ。そうだ」

「何？」

突然声を上げたタギにもオトは動じたりしない。

付き合いも長くなってくれば、そのようなことを一々気にしていは身が持たないと学んだとか以前に言っていた気がする。

こういう関係は、悪くない。

タギは笑い、オトの顔を覗き込んだ。

「ただいま。あと、おかえり」

「……おかえり。ただいま」

不審げではあるが、彼の言葉を繰り返す形になりながらオトもそれに応じた。

「で、急に何？ この村が私の家になった記憶も、あんたが家を買ったっていう覚えもないんだけど」

「いや。ただ単に言いたくなっただけ」

機嫌良く、タギは歩き出した。

気の早いヒグラシの泣き声と、橙に染まった夕焼けを背に。

「そう言える相手がいるっていいよなーって思った」

「……タギ。森の中で変なものでも食べた？」

「まさか」

笑ってタギは宿屋への道を歩く。

その隣にオトが並ぶ。

「おかえり、ただいまって言える相手がいるってけっこう幸せだなと、一人で森を歩いてきて思ったんだよ」

「ふうん」

オトは「珍しい」と呟いたが、それ以上は話さない所以她女もわざわざ聞いてこない。

「そう言えば今日は珍しく、経を一回も間違えずに読み上げられた」「それは珍事なこと。でもタギがお経を読んではるところって、普段の胡散臭い感じが抜けて一番見栄えがする時だと思うわ。間違えてもいいから普段から常にお経読んでたらって思うくらい」

「常に経を上げてる奴って怖くないか？」

「かなり怖いと思う」

爽やかな笑顔で返してくる彼女に脱力する。

「あーでも明日はこの村の墓で経を上げてく」

「そういう風の吹きまわし？ あんたがそんな僧侶らしいことをしようなんて」

オトは不信感を隠すことなくタギを見上げてくる。

「博打に弱そうな旅籠の親父から遠慮なく酒代を返してもらうため晴れやかなタギの答えに、オトは遠慮なく軽蔑の眼差しを送ってきた。

「……生臭坊主」

「生臭上等だって。あー何か疲れた。早く酒飲みたい」

「……やっぱりあんたなんか坊主じゃないわ」

「いいんだよ、俺はエセ坊主なんだろう？」

「違う。あんたは生臭破戒似非坊主」

最初にタギをそう評した彼女は力強くそう言い放つ。

慣れたやり取りに怒るより笑い、並んで夕暮れの道を歩いた。

終幕（後書き）

三ツ世巡りみつよめぐりを読んで頂きありがとうございました。

本編を読んだだけでは少しわかりにくいと思いますが、この話は一応異世界ファンタジーとして今年の六月頃に携帯小説での企画短編として書きました。

文章はほとんどこちらで書いたものと変わらないため携帯小説らしくなく、読みにくいわかりにくいと若干不評だったことも今となっ
ってはいいい経験です。

パソコンからだったら少しでも読みやすくなっていればいいなと思
いながら所々手直しをしたのですが、いかがでしたでしょうか。

読んでくださった方にほんの少しでも楽しんで頂ければ、これ以上
嬉しいことはありません。

まだまだ未熟な書き手ですが、お付き合い下さいましてありがとうございました。
うございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7024h/>

三ツ世巡り

2010年10月8日14時44分発行